

《第三〇回 東洋大学公法研究会》

国際法形成過程における地理情報の影響と重要性に関する研究—宇宙に関する国際法地理学形成のために—

門 脇 邦 夫

報告者 門脇邦夫 (東洋大学大学院博士後期課程)

報告題 「国際法形成過程における地理情報の影響と重要性に関する研究—宇宙に関する国際法地理学形成のために—」

日 時 平成二六年四月二八日 十八時～二〇時

場 所 東洋大学第二号館十四階学習指導室

参加者 名雪健二・宮原均・徐瑞静・荒邦啓介 (以上、東洋大学)、始澤真純 (本学大学院博士後期課程)、鈴木崇之 (本学大学院博士前期課程)

本報告は、二〇一四年四月二八日、東洋大学法学会公法研究会において「国際法形成過程における地理情報の影響と重要性に関する研究—宇宙に関する国際法地理学形成のために—」という表題の下、現在取り組んでいる研究の一部として、行なわれた。以下、本報告の概要及び質疑応答を報告する。なお、質疑応答については発言の趣旨やニュアンスを損なわない範囲で要約を行なった。また、敬称は省略した。

【報告概要】

本報告の目的は、これまでの国際法形成過程において地理情報の重要性が見落とされてきた点を指摘し、国際法形成過程の基礎となる地理情報に関する批判的視点の導入の必要性を提示することにある。

これまで国際法学は、法形成過程における地理情報の影響と重要性を明確に意識してこなかった⁽¹⁾。

国際法学と地理学とを融合させた研究分野、即ち国際法地理学 (仮称) の基礎理論を構築するために、これまではその歴史と理論を検討してきた⁽²⁾。両学問の関係に関する歴史については、大きく三点を取り上げた。即ち、大航海時代における海洋分割・新大陸の発見・先占に関する法形成、十九世紀におけるアフリカ分割、米国の孤立主義から国際主義への転換過程における地理情報の影響である。また、当該歴史に関する検討の過程で、両学問の理論上の接点を明らかにした。即ち、国際法秩序観の形成段階において現代地理学理論の導入が可能である。というのも、国際法の形成は特定の国際法秩序観に基づいており、当該秩序観の形成には地理情報が大きな影響を及ぼしているからである。しかし、当該地理情報には恣意性が含まれている可能性があるにもかかわらず、従来、国際法学はこの恣意性に関する批判的視点を有していなかった。そのため、国際法学は当該視点を導入する必要がある。

この批判的視点という意味で、国際法地理学の現代的課題となり得るのが、宇宙に関する国際法秩序観の批判的検討である。即ち、宇宙は、大航海時代同様、人類の活動領域として拡張し続けており、国際法秩序観形成の基礎となる宇宙に対する空間認識の在り方が批判的に検討されなければならない。しかし、その批判的検討の結果の当否は、宇宙が不確定要素を多く含む空間であるため、容易には検証できない。そのため、地理情報が国際法形成過程に歴史上どのように関係してきたかについて跡付けることで、宇宙に関する地理情報の影響可能性を推論したい。

本報告における議論の出発点と結論は、次の通りである。出発点は、領域法と地理との関係である。国際法上の空間秩序の展開は、国家領域と国際公域に分けるという伝統的区分と当該空間区分の修正に関する歴史であり、その修正の基礎には地理情報の影響が存在する³⁾。そこで以下では、各時代における国際法上の問題と地理情報の影響を整理する。その整理を通して、空間区分の修正の歴史は、地理情報の動態的側面を国際法の枠内に受容している反面、その受容の在り方において空間認識の恣意性に関する批判的知見が軽視されていたことを明らかにする。当該認識は、宇宙の問題にも継続し得るため、地理情報を意識することで是正される必要がある。

三つの事例を示すと、次の通りである。第一の事例は、大

航海時代(十五・十六世紀)における地理情報の影響⁴⁾である。特に、スペイン・ポルトガル間の世界分割に現れている。当該分割にあたって、位置情報の取得及び地図は、分割の基礎であった。緯度はともかく経度の取得は容易ではなかった時代である。この時代における地理情報の影響を三点挙げることができる。

第一に、一四九四年のトルデシリヤス条約に基づいた「分界」(demarcation)を可能にしたことである。「分界」の理念と実践は、コロンブスやマゼラン等の航海によってもたらされた地理情報なしに生まれなかった。

第二に、一見して客観的に見える位置情報は、政治性及び恣意性を含んでいる可能性があり、そのため必ずしも単なる事実として位置付けられない。例えば、コロンブスによる緯度の捏造の例がある。

第三に、「分界」は、ヨーロッパの第三国を排除し、スペイン・ポルトガルの二国間で非キリスト教世界を分配しようとする地政学上の構想であった。この構想の国際法化が意味したのは、スペイン・ポルトガルによる特定の地理認識が国際法秩序形成へ影響を与えてたという事実である。つまり、単なる事実としての地理認識によって国際法秩序形成がなされるということではない。

第二の事例は、十九世紀のアフリカ分割期⁵⁾における地理情報の影響である。特に、一八八四―一八八五年のベルリン会

議における先占規定を巡る議論である。当該議定書の意義は、実際にヨーロッパ諸国と条約締結を行っている様々な形態の国家が数多く存在するアフリカ大陸を「無主地」として扱う契機となった点である。国際法学におけるこの「無主地」概念は、地理情報と結び付いている。即ち、ベルリン会議の論点のひとつであった「コンゴ地域」の地理的範囲及び帰属先の画定は、探検と地形測量に基づく地図学の成果なしには不可能であった。一方で、地図は当時未知であったアフリカ内陸部に関する詳細な情報を各国に与え、他方では空白地域を表示することで帝国主義的拡張の正当化を可能にしたからである。

第三の事例は、モンロー主義及び大東亜共栄圏^⑦についてである。これら二つの広域圏思想は、西欧中心主義的な国際法秩序観の普遍化対批判的意義を有する地域主義という構図として理解が可能である。モンロー主義について、前原光雄^⑧は、それが法原則でないとしてもアメリカ大陸という空間の近接性を基盤とした位置価値は存在しているため、結果として無視できない。即ち、広域圏思想は、国家領域にも国際公域にも区分されないため、伝統的な当該空間区分に修正を求める事例であり、普遍主義に対する地域主義からの批判としての意義を有していた。松井芳郎^⑨や明石欽司^⑩によれば、大東亜共栄圏思想も同様の意義があったと捉えることができるが、批判的視点を徹底することなく、イデオロギーとして機

能した点に問題があったと指摘している。

このような国際法学上の意義を有する二つの広域圏思想は、地理情報による影響を受けていた。日本の場合は今後の課題^⑪であるが、少なくとも、モンロー主義の場合、孤立主義から国際主義へと転換していく過程において、対外政策立案のために地理情報が不可欠であった。

以上、本報告では、地理情報が国際法形成過程に歴史上どのような影響を与えてきたかについて特に三つの事例を検討した。即ち、①大航海時代、②アフリカ分割、③広域圏思想である。これら三つの事例の検討は、充分とはいえないにしても、一貫して地理情報を基礎とした「特定の」国際法秩序観に基づいて、国際法形成がなされてきたことを明らかに示している。そこでの地理情報は、恣意性を含んでいた。そのような恣意性を含む特定の国際法秩序観は、主として普遍主義対地域主義をつくり出していた。このことは、国際法秩序観とそこから導かれる国際法形成の多様性を意味する。

このような文脈の中で、国際法における伝統的な空間認識、即ち国家領域と国際公域の二区分に対する修正が行われてきたのである。広域圏思想の事例は、その証左であり、位置価値に基づく圏の設定、即ち空間区分の修正は批判的に検討される余地がある。その検討には、現代地理学理論が有する批判的視点が必要である。なぜならば、国際法学における空間の修正に関する歴史において、空間の実態を批判的に

捉える視点は依然として希薄だからである。つまり、広域圏思想の基礎にあると思われる近接性の視点以外の空間解釈の視点を見出すことができないからである。

このように、国際法学は地理情報の恣意性に対する関心が希薄であること、当該情報に基づいて国際法秩序観が形成され、それが国際法形成過程に結び付いていること、が明らかとなったと考えられる。

最後に、以下の課題が挙げられる。即ち、現在や将来の問題に対しての国際法地理学による類推と適用可能性を検討することである。例えば、宇宙空間における地理情報の恣意性の有無を検討することである。この点については、恣意性という用語を用いていないが、宇宙に関する法地理学の視点から論及したものとして、Collis (2009)¹²⁾がある。また宇宙空間の認識に関する地理学研究として、例えば宇宙という空間認識やそこから地球上の問題を再検討する研究¹³⁾、あるいは火星等の天体の地図情報の誤りや恣意性等を検討する研究もある¹⁴⁾。

宇宙空間における地理情報の恣意性という視点から検討することが紛争の抑止に結び付くならば、国際法学研究として有益な課題と言えるであろう。

【質疑応答】

質問A「スケールについて以前報告があったが、その後議論

の発展性ないし進展性はあったか。」

報告者「前回の報告¹⁵⁾において、スケールは部品の一部であり、他にも場所論を導入する必要を述べた。最近の論文¹⁶⁾は、その後の進展として位置付けられる。加えて、本報告はスケールや場所論に関係する事例研究の端緒として位置付けられる。」

質問A「前回の報告において、オゾフスキー論文¹⁷⁾についても述べていたが、国際法学と地理学をリンクさせた研究は他にも結構出てきているのか。」

報告者「イエール関連や第三世界に関する国際法理論関連等で存在していることが分かってきた。これらの研究を踏まえて注2の論文にした。即ち、国際法秩序の基礎となる国際法秩序観の形成に地理情報が影響を与えているという趣旨をこれらの論文から読み取れた。」

質問B「強い国であるとか権威を持った国が地理情報を恣意的に扱い、そこから国際法が生じてきたが、この点を国際法学は軽視してきたのではないか。その一例として、本報告では大東亜共栄圏論の批判的再検討に関する国際法研究を紹介したという理解でよいか。」

報告者「その通りである。大東亜共栄圏というアイデアそれ自体は、ヨーロッパ中心主義的な国際法秩序観へのカウンターとしての役割があり、国家領域とは異なるスケールとして広域圏を設定した事例としても地理学上の意義を有する。」

即ち、広域圏は、地理情報と国際法秩序観とが結び付いた事例である。勿論、現代国際法学研究は、広域圏のイデオロギー的側面を評価しない。むしろ、この点については批判的に議論する必要性を指摘している。その上で、現代においてはグローバルゼーションを普遍主義と捉えた場合に、広域圏のような先例は、他方で地域主義の側面を意味する地理学上のアイデアないし国際法秩序観の重要性を明確化する契機であると言える。」

質問B「大東亜共栄圏の潮流は、戦中においても少なくとも四潮流くらいの政治潮流の一つであり、より大きな文脈の中に位置付ける必要がある。」

質問C「法にとって事実、重要である。自然科学的事実や社会科学的事実がルールの土台となる。事実が誤りであれば、ルールが崩壊する。憲法では立法事実論という話である。本報告の場合、土台となる事実は地図情報である。これに関する歴史事例の紹介がいくつかあったが、将来、例えば宇宙法分野においても地図情報の影響を考える必要がある。本報告は、地図情報の恣意性を排除しなければならないという趣旨で歴史事例を紹介したのか。」

報告者「恣意性は排除できない。経度緯度で示す位置情報一つにも何らかの意味が含まれている。その意味は一樣ではないのであり、認識に差異が生じる。この差異を調整していく必要があるという趣旨であり、恣意性は排除可能で、正しい

意味付けがあるということではない。」

質問C「地図情報は、純粹に自然科学的な問題であると思つたが、緯度経度のような地図情報の段階で人間臭い話が含まれる。なかなか理解が到達出来ないかもしれないが、やはり客観的であるはずの部分に不透明なものが入ると議論が出来なくなるように思う。憲法訴訟の場合にもあるが、このような世界がやはりあるのだと思いました。」

質問D「国際法学と地理学との関係に関する問題が日本以外ではどのように議論されているのか。諸外国でもやはり同じように恣意性を指摘する研究はあるのか。」

報告者「すべてを参照しているわけではないが、地図情報の恣意性について言及する研究はある。」

質問D「判例に相当するような実際の事件とか事例はありますか。」

報告者「勿論、地理に関係する問題が判例になっているものはある。例えば、脱植民地化の文脈における隣国との境界画定の問題で、地理的事情が考慮された仲裁判例が結構ある。

但し、人文地理学面での批判的な検討は恐らくなされていない。⁽¹⁸⁾国際法学上の地理は、自然地理学上の地理である。人文地理学の要素があるとすれば、例えばモンロー主義の事例において、前原光雄先生の近接性に基づく原理を基盤とした空間の位置価値の重要性に関する指摘が見出せる。もともと、現在ではスケールや場所論のような批判的見方があり、近接

性の原理に留まらない複数の空間解釈の技術を検討する必要がある。国際法の判例は、必ずしも空間解釈の可能性を明確に意識していないように思う。」

質問E「今後、宇宙法では火星も議論の対象となっていくと思うが、南極大陸の領有権主張も地理との関係で恣意性を含んでいるか。」

報告者「セクター理論を含め、何らかの線を引くことは、恣意性を持たざるを得ないと思う。」

質問E「将来、火星の土地の配分はどうなるのか。」

報告者「現在の宇宙法では領有自体が禁止されている。しかしながら、社会の変化や実態に応じて、法が作られる図式はある。宇宙法も例外ではなく、その可能性があるのではない。この種の議論は、即座に法学の議論とはならないため、本報告では議論の中心に位置付けなかった。」

質問C「本報告は、今後の博士論文のどこに位置付けられるのか。博士論文は、宇宙法の分野になるのか。本報告は、歴史事例であったが、宇宙法の検討にも有益なのか。」

報告者「本報告で扱った歴史事例が中心であり、宇宙法の部分は相対的に少なくなる。博士論文では、これら歴史事例における地理情報の影響をより詳細に検討する。その影響の在り方の検討を通して、宇宙法の検討に有益な部分を探りたいと考えている。」

質問B「国際法思想に関係する報告であり、より一般的には

法と政治の関係に関する議論である。外交史学にも関心に向けてもよいかと思う。例えば、『外交時報』には本報告に係わる内容があるのではないか。」

報告者「あると思う。そのような内容の地理的観点も意識しつつ検討する必要がある。」

質問F「将来起こり得る宇宙空間の配分の根拠として、地理情報は位置付けられるという趣旨か。」

報告者「地理情報は、紛争を抑止するための根拠として位置付けられると考えている。」

註

(1) 現代地理学理論の導入可能性を指摘した先行研究については、例えばHari M. Osolsky, *A Law and Geography Perspective on the New Haven School*, 32 YALE J. INT'L L. 422, 422-452 (2007).

(2) 拙稿「『国際法学と地理学』との関係性：オゾフスキー論文の国際法学的検討」『大学院紀要（東洋大学）』第四八集（二〇一一年）一一三―一三八頁。拙稿「Osolsky論文の批判的検討：『法学と地理学』の関係性の視点から」『東洋法学』第五六巻第三号（二〇一三年）、二二―一三三八頁。拙稿「国際法学への地理学導入序説―国際法秩序観の形成のために―」『大学院紀要（東洋大学）』第五〇集（二〇一三年）、二九―四五頁。

(3) 当該視点に関する先行研究として、前原光雄「空間と国際

法』『国際法外交雑誌』第四一巻第一〇号(一九四二年)一三四頁。但し、当然のことながら当該論文においては、現代地理学の導入に関する視点は無い。

(4) 許淑娟『領域権原論』(東京大学出版会、二〇一二年)。合田昌史『マゼラン―世界分割を体現した航海者』(京都大学学術出版会、二〇〇六年)。

(5) 当該事例の詳細については、拙稿・前掲注(2)、『大学院紀要(東洋大学)』(二〇一三年)を参照。尚、当該事例の参考として、以下のものを参照。許・前掲注(4)、『及ひ T. J. Bassett, *Cartography and Empire Building in Nineteenth-Century West Africa*, 84 GEOGRAPHICAL REV. 316, 316-335 (1994)。

(6) 前原・前掲注(3)、『五一―一五頁。』

(7) 明石欽司『大東亜国際法』理論―日本における近代国際法受容の帰結―『法学研究(慶応大学)』第八二巻第一号(二〇〇九年)二六―一二九二頁。松井芳郎『グローバル化する世界における「普遍」と「地域」―「大東亜共栄圏」論における普遍主義批判の批判的検討―』『国際法外交雑誌』第一〇二巻第四号(二〇〇四年)一一二二頁。あるいは大東亜共栄圏論へのモノロー主義の影響関係を論じたものとして、井筒康人『大東亜共栄圏』と汎アメリカ主義―神川彦松と松下正寿の議論から―『年報近現代史研究(名古屋大学)』第五号(二〇一三年)一五―二九頁。

(8) 前原・前掲注(3)

(9) 松井・前掲注(7)

(10) 明石・前掲注(7)

(11) 恐らく、竹内正浩『地図で読み解く日本の戦争』(筑摩書

房、二〇一三年)。小林茂『近代日本の地図作成とアジア太平洋地域―「外邦図」へのアプローチ』(大阪大学出版会、二〇〇九年)。から地理情報の影響について見出すことが可能であると考えられる。

(12) Christy Collis and Phil Graham, *Political Geographies of Mars: A History of Martian Management*, 4 Management and Organisation History, 247, 247-261 (2009)。

(13) HEATHER WHIPPLE, EXTRATERRESTRIAL HUMAN GEOGRAPHIES (2013); DENIS COSGROVE, APOLLO'S EYE: A CARTOGRAPHIC GENEALOGY OF THE EARTH IN THE WESTERN IMAGINATION (2001)。

(14) 例へば、Jason N. Dittmer, *Colonialism and Place Creation in Mars Pathfinder Media Coverage*, 97 The Geographical Review, 112, 112-130 (2007); K. Maria D. Lane, *Mapping the Mars Canal Mania: Cartographic Projection and the Creation of a Popular Icon*, 58 Imago Mundi, 198, 198-211 (2006); K. Maria D. Lane, *Geographers of Mars: Cartographic Inscription and Exploration Narrative in Late Victorian Representations of the Red Planet*, 96 Isis, 477, 477-506 (2005)。

(15) 拙稿・前掲注(2)、『東洋法学』(二〇一三年)。

(16) 拙稿・前掲注(2)、『大学院紀要(東洋大学)』(二〇一三年)。

(17) *supra* note (1)。

(18) その他の事情、即ち人文地理学の要素は、恐らく国際法学では非地理的要因とみなされている。そのため、経済的要因等の空間上の側面が地理的要因として明確に意識されていない。(かどわき・くにお 東洋大学大学院法学研究科博士後期課程)